（１）下田中学校

学　　校　　長 山﨑　利彦
校内研究代表者 石﨑　千波

１．研究主題

『主体的・対話的な授業を通して、思考力・判断力・表現力の育成をめざす』
～教科間連携の取り組みを通して～

２．主題設定の理由

昨年度まで指定を受けていた、「中学校教科間連携による授業力向上実践研究」により、研究体制の軸となる取り組みも確立し、成果と課題が明らかになってきている。生徒集団の特徴として、主体的・対話的な学習をする基盤が弱く、学習意欲を高めることが難しい。また、本校は、隣接する児童養護施設に不定期に入所してくる生徒たちも多く、厳しい環境で生活してきたために、自尊感情が低く自己表現が苦手なために他人と良好な人間関係づくりができにくい生徒も見られる。これらのことから、活動時には、活動せざるを得ない環境を作ったり、知識を活用する実践的な場面を設定したりすることで、見通しと意欲をもたせて主体的な学びにつながる授業の研究を深めている。特に、個人の思考を深める教授法の工夫を大切にしつつ、課題解決のために対話的な学習を行うことで、思考力・判断力・表現力を育む授業の創造に努め、学力の向上につながる授業づくりを組織的に研究し、確立していきたいと考える。また、教科の壁を越えて、共に学び合う教師集団が焦点化された協議を行うことで、本研究主題にせまりたい。

３．研究の進め方と方法

チーム会を軸にした以下の４つの取組により研究を進めている。
（１）チーム参観　（２）チーム協議　（３）校内研修　（４）実践ミニレポート
研究チームを２チーム編成し、毎週木曜日にチーム会を実施する。チーム会では、研究テーマに迫るための授業づくりについて、公開授業の指導案検討や授業後の協議等を行っている。また、校内研修において、２チームの研究の進捗状況を報告し、全員で学びを共有する。

４．研究組織図

【教科間連携による授業力向上推進委員会】
（管理職、研究主任、チームリーダー）

チームＡ

Ａチームリーダー（ファシリテーター）

・音楽担当　・保健体育担当
・社会担当　・英語担当
・理科担当　・技術担当

チームＢ

Ｂチームリーダー（ファシリテーター）

・数学担当　・家庭担当
・国語担当　・特別支援担当(知的)
・養護教諭　・英語担当

５．研究内容　～教科間連携による授業力向上の取組について～

下田中学校が昨年度までの２年間取り組んできた「中学校教科間連携による授業力実践研究事業」の指定は終わったが、昨年度の課題や生徒の実態を踏まえて、研究主題に迫るために思考力・判断力・表現力のさらなる育成をめざし、学校の組織的な授業改善や授業力向上のための体制づくりが構築できるよう研究している。昨年度の実践から内容を見直しつつ、次のような研究仮設のもと、思考力・判断力・表現力等を育む授業づくりの実践を行ってきた。

①一人一人の主体的な学びを促す授業が展開できれば基礎基本の定着が図られ学びの質が高まるであろう。
②自分の考えを持ち伝えることができる対話的な授業を仕組むことで生徒の思考力・判断力・表現力が高まるであろう。

これらの仮説から、今年度は、①下田の学びのスタイルの充実　②授業における効果的な帯びタイム・小テストの活用　③班活動・ペア活動等の効果的な学習形態・活動の工夫　の３つの具体的研究内容を設定し、教科間連携を通して授業改善を図っている。

（１）チーム参観

参観者と授業者が協議等によって学びを深めるためのチーム総見授業を行っている。授業を参観するときには、参観シートを活用して授業を見取っている。また、参観シートには生徒のつぶやきや活動の様子を記入しチーム協議時に活用している。チーム総見授業は各学期に各自が１回ずつ行うこととし、全校研は、各学期各チーム1回ずつ授業を行った。

（２）チーム協議

毎週木曜日の時間割に組み込んでおり、（１）のチーム参観を受けて参観した授業の事後協議を行ったり、学習指導案の検討や模擬授業を行ったりする。また、定期テスト・各学力調査の振り返り等を行うこともある。主に、研究主題に迫るための具体的研究内容について協議を深めてきた。

（３）校内研修

（２）を受けて、研究主任が作成した研究推進委員会で協議したことを基に、各チームの情報共有を行う。また、各チームから出た意見から指導主事等を招いた研修を行ったり、本校の課題から新たな取組を決定したりする。今年度は、総合的な学習の時間の計画について、「生徒の主体的な活動になるためには、どのような課題を設定すればよいか」ということについて、西部教育事務所の指導主事の方々に協力いただいて、総合的な学習の時間の授業づくりについて研修を深め共有した。１学期に実施された全国学力状況調査の結果分析後のチーム協議では、授業改善における今後の取り組みについて、次のような課題がみえてきた。

書く力を付けるためには、自分の考えを自分の言葉で表現できる力を身につけさせることが必要ではないだろうか。今後の取り組みとして、「振り返り」の中で「自分の言葉で書く」ことを実践していく。

振り返りの内容　今日の授業で
・わかったこと。
・気づいたこと。
・わからなかったこと。

「振り返り」の時間を確保し、授業で分かったことや疑問について書かせることを全教科で実施することにした。２学期以降は、県版学力テストに向けて、基礎基本の定着を中心に、下田の学びのスタイルを意識し、共通の取組を行うことを決定した。

（４）実践ミニレポート

各学期に１回ずつ、主に授業者の学びを深めるために自身の実践をまとめたレポートを作成し、各チームで発表、その後、校内研修で各チームの代表２つのレポートを発表し、成果のあった取り組みや課題の共有をする。この取組は、教師自身が自分の授業の振り返りを促すとともに、教員相互で学び合い、授業実践し、さらに授業改善を図るといったものである。

チームによっては、対象学年や課題を絞って１年間実践する等の工夫があったり、レポート発表を聞き、自身の授業に取り入れたりその後の実践に生かしたりすることもあるなど、より深い実践となっている。

実践ミニレポート　NO.　担当教科　氏名	
【チームの研究テーマ】主体と対話 【研究内容】①下田の学びのスタイルの充実 ②授業における効果的な帯タイム・小テストの活用 ③班活動・ペア活動等の効果的な学習形態・活動の工夫	
【レポート1②の活動内容】＊5 教科	【成果と課題を通した生徒の変容　】
【レポート2　①③の活動内容】 ＜★具体的な学習形態や活動の工夫＞	

具体的研究内容

数値や成果物等で生徒の変容を見とれる内容

６．今年度の成果と課題

研究組織や体制は確立されつつあり、計画的にチーム会（教科間連携）を実施することができている。4 つの取り組みでは具体的研究内容を意識し、各チーム・各教科で取り組むことができた。チーム参観から見えた課題をチーム会、校内研で協議し、取り組むという全教員の意識が高くなっている。特に、基礎基本の定着を図るための取り組みでは、帯タイムの内容について課題があり、各教科で実践していく中で、反復的な活動や小テスト・既習の内容を使った言語活動など、各教科で工夫して実施することができ点数にもつながってきた。（漢字や単語テスト等）

今年度の学校評価アンケートのでも、次のような項目で、「教科間連携の取り組みは授業力向上に役立っている」（思う―45%、まあ思う―55%）、「同じ方向を向き共同的に取り組んでいる」（思う―62%、まあ思う―38%）という肯定的評価となっている。

また、「書く力」をつけるための取り組みでは、「振り返り」の時間を確保することで、生徒側も教師側も理解度を把握することができ、授業構成や指導内容を見直すことができた。しかし、自分の考えを伝えることに消極的な面があり、思考の深まりやグループ学習に課題がある。今後の取り組みとしては、各授業では、教え合いや、話し合いができる学習形態（支援し合える班やペア）を工夫すること、また、学級経営の中で人間関係の構築をしていくことで、学力向上につながるのではないかという確認をした。

新しい取り組みとして、今年度はチーム会で「総合的な学習の時間」の計画の見直しについての協議を行った。全学年の内容について網羅することができたため、学年部での取り組み内容を横断的に考え、計画することができた。来年度は、道徳や人権学習についても取り組みを進めていきたい。

最後に、学力テスト等の結果分析を行う中で、記述式の問題に課題がある生徒、基礎基本の定着に課題がある生徒など、生徒一人ひとりが抱えている課題が見えてきた。少人数の本校だからこそ、個々の生徒に関わり、生徒の課題を克服させていく授業の取り組みの必要性を痛感する。今後は、個人の学力状況の変化に着目していきながら、基礎・基本の学力の定着と思考力・判断力・表現力の育成のバランスのとれた主体的・対話的で深い学びのある授業づくりの実践を目指していきたい。